

社会的ネットワーク分析

——「読者参加型論文」の効用——

山 口 洋

社会学の調査研究で、論文にデータそのものが記載されることはめったにない。データの分析結果と結論とが記されるだけである。紙面の都合上仕方のないこととはいえ、分析結果や結論に疑問を感じたり、自分なりの別の解釈を思いついたりしても、直接それを確かめる手段が読者には与えられていない。もっとも、調査データの公開は我が国でも徐々に進みつつあり、論文にデータ使用希望者への案内が書かれていることもある。しかし多くの場合、ある論文を読んで感じた疑問は、自分で調査研究を実行することで解消する以外に手がない。

その点、ネットワーク分析を用いた研究では、論文にデータそのものが記載されていることが多い。小集団研究や社会心理学の実験研究では、むしろ、ネットワークデータが記載されていない論文の方が珍しいくらいである。十数人程度のネットワークデータであれば、グラフやマトリクスを用いて論文に難なく載せられるからである。読者は論文に記載されたネットワークデータを使って、筆者の分析を追試できるし、自分なりの分析を試みることもできる。そして、その同じデータの別の解釈を自分の論文にしたためることもできる。筆者と読者でデータが共有されているため、論文という媒体を通じて比較的にかみあった議論が可能となる。こうしたいわば「読者参加型」の論文の存在が、ネットワーク研究の独特のメリットになっている。

その典型例が1980～90年代のネットワークとパワーに関する一連の研究である。交換理論家エマーソンの研究グループは雑誌論文で、横一直線に5人が並ぶ交換取引のネットワークを示し、社会心理学的実験の結果、直線の中点に位置する人物ではなく、その両隣の二人のパワーが最大だったと報告した。従来

のネットワーク理論では、単純に中心人物のパワーが最大だと信じられてきただけに、この論文の反響は大きかった。読者達は、この論文の幾つかのネットワーク（上記の5人のものを含む）と、パワーを測定した実験結果とを結び付けるべく、様々な理論を編み出しては自らの論文に発表していった。結果的に、同じデータの解釈をめぐる数多くの論文が専門誌等を賑わすことになった。こうして社会科学系の研究分野としては珍しく過去の研究に新たな研究が積み重なり、継続性のある研究分野が形成されていった。

しかし、社会学、特に調査研究を主体とする分野では、このような事例は例外中の例外にとどまっている。一つの経験的データの理論的解釈をめぐる議論が沸騰することはまれで、理論的な解釈をめぐる議論が充分なされないままに、多くの経験的データが量産されては忘れ去られていくというのが実状であろう。とはいえ、すべての研究分野に、ネットワーク分析のような「読者参加型」の論文を求めるのは無理である。要は一つの調査データが多くの研究者によって共有され、追試・再分析される状況があればよいのである。それには、まず社会調査のデータベース等のさらなる整備が必要であろうし、そして何より、他の研究者によって追試・再分析されるに足る、魅力的な調査研究が多数生み出されなくてはなるまい。

（やまぐちよう 佛教大学社会学部社会学専任講師）